

## 平成29年度第1回総合教育会議 主な意見(案)

金本委員	不登校の要因の多くが、家庭や本人の生き方の問題なのかも知れないが、学校という場で突破口を見つけることはできると思う。不登校イコール問題行動と決めつける社会的傾向がまだ強く、それがかえって子どもたちの不登校解消を阻んでいるということもある。
	不登校の解消のためには、大人は子どもにとって困難な状況と同じ目線ととらえ、その気持ちを共感的に理解し、子どもと一緒に考えながら解決策を見出していくべき。その際、専門的な見地と身近な大人の見方が織り交ざって子どもに接していくチームプレーが必要である。
	子ども自身が、勇気を持って自己に向かい合い、困難から逃げるのではなく、それを乗り越えたいという意識を持つことができるように大人は関わっていくべき。
	不登校の問題に本気で取り組むためには、知事部局と教育委員会がオール県庁で連携をしていく必要がある。第2回会議においては、教育委員会と知事部局の連携による取組を我々も提案していきたいと考えているので、事務局においても、その視点から、強化、充実していくべき取組などを重点化して示してもらいたい。
京谷委員	不登校に関する県の取組は充実しているが、よいアドバイスやきっかけをもらっても、最後に一步を踏み出すのは自分である。一步踏み出すのに必要なのは、夢や目標や希望である。小さなことでも一つやり遂げることによって自信が生まれ、新たな行動、新たな夢や目標につながっていく。
	不登校の要因が無気力や不安ということであれば、意欲になれる魅力ある学校づくり、不安がなくなるような仲間づくりが不登校を未然に防ぐのでは。教員の力のみで頼るのではなく、児童会や生徒会が中心となって、楽しく登校することのできる学校をつくっていくべき。
佐藤委員	現在行われている学校側からの不登校の要因についての分析に加えて、子どもや保護者の視点からの分析を加えていくことができるとうい。
	小学校・中学校間の連携を充実することが重要。県内の義務教育学校では、9年間を4年、3年、2年と区分しており、よりきめ細かい教育とサポートに結び付いている。小学校、中学校の教員や児童生徒同士の交流をより組織的、活発にしていくことが望ましい。
	不登校状態の子どもにとっては、小休止したり、遠くを見ることも大切であり、その状態から大人になるための道は多くあることが望ましい。中学校に三部制の定時制学校のモデル校をつくらせたり、適応指導教室のメニューを充実させるなど。
	訪問相談員は担当教員にとって負担が大きい場合もあることから、各職種間の連携充実、担当教員がカンファレンス、スーパーバイズを受ける時間を十分に設けるべき。 特別支援学校、特別支援学級における不登校児童生徒に対する方策についても見直し、検討していくべき。
井出委員	不登校を未然に防ぐことが学校教育の重要な課題。中学校で不登校者数が小学校の3.5倍になるということは、新しい学校生活になじむことができないことの表れである。学校教育の範囲でできることは、新しい世界に入っていき児童生徒に対する事前の指導により、希望や夢を抱かせること。大学でも1年生の最初に初年次教育と称して、高校と大学の違いを自覚させ、長期欠席や中途退学を防いでいる。全ての児童生徒は、「よりよく生きたい」という根源的な欲求があると、いう前提に立って、学校は子どもたちに困難を乗り越える力を育成するという課題を認識するべき。
岡本委員	不登校の要因については、学校側からの分析しか示されていないが、本当に一人一人の真の要因を突き詰めると、百人百様の違う原因があると思われる。
	様々な不登校対策は既に行っているもので、これ以上の対策としては、楽しくて行きたくなる魅力のある学校をつくることである。県立松戸南高校等における不登校経験者に対する実践やその成果について、県内の学校に周知するなどにより魅力ある学校づくりを進めていくのがよい。
内藤教育長	不登校の要因は百人百様であろうから、該当の子どもに対して、カウンセリング、福祉、医療などのような処方箋が必要かを見極めるために、チームで対応していくことが重要。また、作成中の不登校対策指導資料集も、そのような視点から活用してもらえるものにする。 学校が連携していくべく機関として、学校の雰囲気合わない子どもたちが居場所を求めて通うフリースクール、不登校の親同士の意見交換会などが挙げられる。不登校児童生徒を支援する関係者同士の情報交換の場を設定することも有効と考える。また、不登校のまま卒業したり、中途退学した児童生徒が存在することから、地域若者サポートステーションなど、福祉、労働部門への橋渡しなどの連携を充実していく必要がある。
森田知事	子どもたちにとって、自分の力で困難を乗り越えていくことが大切だと思うが、不登校も初期段階であれば、自分で何とかしようとする力が残っているはずである。私自身も成績が上がらず、自暴自棄になりかけた時に、母親から、自分しか持っていないいいところを見つけて頑張るんだ、と言われ、我に返って頑張ることができた経験がある。親がわが子をしっかりと見て、何らかの兆候を感じたり、危ないと思った段階で、相談に来れるような仕組みづくりが必要である。